

「WHO 統合国際診断面接第5版(CIDI 5.0)日本語版の活用における
保健師との連携に関する研究」

分担研究者 吉岡京子（国立保健医療科学院 生涯健康研究部 上席主任研究官）

研究要旨

本研究は、WHO 統合国際診断面接(Composite International Diagnostic Interview, CIDI)5.0の日本語版（面接者使用版、自己回答版）の開発に向けて主に行政で働く保健師との連携に関する検討を検討することを目的とした。研究班会議を令和3年2月23～24日に開催し、保健師との連携に関して研究代表者および分担研究者と検討した。その結果、保健師は地域における保健活動において、精神障害を有する可能性のある未治療の当事者やその親族・近隣住民から日常的に相談を受けており、彼らを精神科医療へつなげる支援を行っている。しかし、精神科受診に対して当事者やその親族から極めて強い抵抗を示される場合が多々あり、対応に苦慮している。CIDI5.0を地域保健の現場で活用できれば、これまでよりも円滑に当事者を早期に精神科医療につなげられる可能性があることを共有した。次年度以降、CIDI5.0の開発を進めると共に、保健師との連携や地域保健の現場での活用可能性についてさらなる検討を重ねる必要がある。

A.

研究目的

本研究は、WHO 統合国際診断面接(Composite International Diagnostic Interview, CIDI)5.0の日本語版の開発に向けて主に行政で働く保健師（以下、保健師とする。）との連携に関する検討を行うことを目的とする。

B. 研究方法

令和3年2月23～24日に開催された研究班会議（以下、班会議とする。）において、CIDI5.0の開発に向けて保健師との連携について研究代表者および分担研究者と検討した。

C. 研究結果

CIDI5.0の試作版を読み、保健師の観点から活用可能な場面について検討し、班会議でフィードバックした。すなわち、保健師は地域における保健活動において、精神障害を有する可能性のある未治療の当事者やその親族・近隣住民から日常的に相談を受けており、彼らを精神科医療へつなげる支援を行っている。しかし、保健師に相談が寄せられる段階では、当事者が精神科の確定診断を受けていない場合が大半を占めている。このため、当事者や親族が精神科を受診することに対して極めて強い抵抗を示される場合が多々あり、対

応に苦

慮している。CIDI5.0を地域保健の現場で活用できれば、これまでよりも円滑に当事者を適切な精神科医療につなげられる可能性があることを共有した。

D. 考察

これまで地域における保健師の保健活動において、CIDIはほとんど活用されていなかった。しかし、本研究により開発を目指すCIDI5.0が地域保健の現場で活用されれば、未治療の当事者の精神科医療へのアクセスが大幅に改善される可能性が考えられる。また、保健師がCIDI5.0の結果に基づき、当事者やその親族に対して精神科医療の必要性を明示できれば、従前よりも精神科医療の必要性に対する彼らの理解と協力を得やすくなり、早期受診に寄与できると考えられる。

E. 結論

本研究により、地域における保健師の保健活動において、CIDI5.0を活用できる可能性があることを確認できた。次年度以降、CIDI5.0の開発を進めると共に、保健師との連携や地域保健の現場での活用可能性についてさらなる検討を重ねる必要がある。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

なし

2 実用新案登録

なし

3. その他

なし